



私の趣味

会員 柳沢 可奈子 (61 期)



1 音楽の教師をしていた祖父、フルート教室を開いていた母の影響もあり、小さい頃からクラシック音楽が身近にありました。

幼稚園に入園すると、ヤマハ音楽教室に通い、オルガンを弾いたり、歌を歌ったりして音楽に親しみました。そのおかげか、絶対音感が身に付きました。

小学校に入学してから、本格的にピアノのレッスンに通い始めました。初めは、バイエル、ツェルニー100番練習曲など、子どもにとっては単調な曲の練習でした。それでも、ピアノの先生や母に褒められるのがうれしくて、練習に励んだ記憶があります。

小学校高学年になると、ようやく、世に知られた曲を練習する機会が与えられるようになりました。ピアノの先生から、ショパン作曲の『子犬のワルツ』を練習するように言われたときの興奮を今でも覚えています。

2 小学校低学年の頃、何気ない会話の中で、右手の人差し指の第1関節が曲がらないことに気がきました。

病院に行ったところ、幼稚園の頃に右の掌を切る大怪我をした際に、右手の人差し指の第1関節の神経が切断されていたことが判明しました。今では考えられないことですが、レントゲンも撮らずに縫合されたようでした。医師からは、手術をして神経を繋げることは可能であるが、まだ成長段階なので、大人になってからでないと手術はできないと言われました。また、医師によると、私の右手の人差し指は動かなくなってしまってもおかしくない状態であったが、ピアノがリハビリになっていたのだろうとのことでした。

大人になった今も、結局、手術はしていません。第1関節に全く力が入らないので、ペンやお箸を正しく持

つことができず、恥ずかしい思いをすることもあります。が、日常生活で差し支えることはありません。ピアノを続けてきたことがリハビリになったのだと思い、これまでピアノを続けることができたことに感謝しています。

3 高校3年生の時は、大学受験に専念するために1年間ピアノをお休みしましたが、大学に入学してから再開し、高校の時までの恩師に紹介していただいた先生のお宅へ隔週で通い始めました。今でもお世話になっているその先生は、非常に厳しい先生で、作曲家の真意を少しでも歪曲化するような演奏をすると、容赦なく叱責されます。最初にご自宅へ伺った際に、「私は、音大生が来ても同じレッスンをするわ」と言われました。こちらも真剣勝負で挑まなければならないと覚悟しました。

レッスンは毎回2～3時間休憩なく続き、その後に2時間程度、先生と歓談してから帰宅します。「弾き手は、作曲家が遺した楽譜から作曲家の意図を汲み取り、忠実に再現しなければならない。それはプロであってもアマチュアであっても同じこと。弾き手は作曲家に対して、決して傲慢になってはならない」と先生はおっしゃいます。法学部で立法趣旨や法律の解釈を学ぶのと同じように、ピアノのレッスンでは、作曲家の意図や曲の解釈を学びます。

4 さて、今年も残すところあとわずかになりました。年の瀬には至るところで『第九』を耳にすることでしょう。何かと殺伐とした世の中だからこそ、新しい年も音楽と触れ合い、心に潤いを与える一年にしたいと思います。